

二次元ぶち文庫

けものっ娘は

発情中!

伊吹泰郎

表紙イラスト：鈴音れな



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『けものっ娘は発情中！
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



けものっ娘は

発情中!

伊吹泰郎

表紙 / 鈴音れな

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

りゅうや

竜也

依頼を受け、化け物を退治する退魔師の青年。

みずず

美鈴

竜也に従う猫娘。のほほんとした性格で、性には奔放な性格。

しらゆき

白雪

竜也に従う狼娘。性格はキツく、性にはオクテだが興味がないわけではない。

——夜。

満開の桜の木の前に、一人の若い男が立っていた。

名を金田きんたいち一竜也という。

顔は十人並みだし、出で立ちもジーンズにシャツというありふれたものだ。しかし、佇まいにはどこことなく人を惹きつける雰囲気があった。

竜也の肩には、一匹の子猫が背中を丸めて乗っている。模様は明るい茶色の虎縞。いかにも人懐っこそうであり、小さな身体からは、たとえ猫好きでなくても思わず目尻が垂れそうな愛らしさが発散されている。

もつとも、そんな可憐な連れがいるというのに、竜也の口元には剣呑な笑みが浮かんでいた。

「……できれば、今後はおとなしくしててくれるとありがたいんだけどね。俺も面倒な実力行使は好きじゃないんだ」

彼が話しかけているのは桜の木だった。だが、ふざけているのではない。花見酒に酔っているでもない。

そもそも、今は九月末。桜の花が咲いていること自体、異常なのだ。

ザワリ——。

竜也へ応えるように、木の枝が風もないのに大きく揺れた。さらに数本が、空へ向かつ

て伸び上がる。

その植物ではありえない敵意むき出しの動きに、青年は小さく溜め息を吐いた。「やれやれ、やつぱり聞いちやもらえないか。……俺って交渉が苦手なんだよなあ」

直後、枝は一気に長さを増し、鞭のようなしなりと速度で、一人と一匹に迫る。

「おっと」

竜也は身を捻り、最小限の動作で打撃をかわした。同時に肩から子猫が飛び降りる。

猫は空中で一回転し——不思議なことに、途中で生き物としての形を完全に失ってしまった。顔も胴体も手足もない、空気へ溶け込む霧のような状態。そんなあやふやな姿がふわっと膨らみ、すぐに人そっくりの形となる。

スタツ……!!

地面に降りた時、子猫は少女に変身していた。

髪の色は変身前と同じく明るい茶。それが活動的なショートカットに纏められている。ただ、フサフサした奥からは、尖った猫耳が二つ、獣だった名残のようにピョコンと顔を覗かせていた。

顔立ちはやや子供っぽい。瞳の端が多少つり上がり気味なものの、パッチリ大きいため、きつい感じは微塵もなかった。

そして、小柄な身体は生気に満ちている。それを包むのは巫女衣装、つまり白い着物と

真紅の袴だ。袴の後ろには小さな穴が開き、人の姿になっても生えたままの尻尾を外へ出すための抜け道となっていた。

「ご主人様っ」

少女はステップを踏むように身体を反転させ、舌足らずな声で竜也に呼びかける。

「美鈴、油断するなよっ！」

竜也は桜からの二撃目を危なげない足取りでかわしながら、枝の届かない場所まで後退した。

「任せてっ！ 美鈴っ、いつきまあすっ！」

猫娘——美鈴はグツと脚のバネを効かせ、桜の木へ向かって跳躍する。さながら引き絞られた弓から放たれる矢のような勢いだ。

「てにゃあっ！」

どこか緊張感のない気合を発しながら、右手を振るう。だが、声には力がなくとも、威力は絶大であった。爪が当たった木の幹は、十センチ近くも深々と抉れたのだ。

だが、桜の木は全くひるまない。むしろ飛び込んできた美鈴を、格好の獲物とばかりに数本の枝でからめとってしまう。

「あ、あにゃ……？」

美鈴は自分の身に何が起こったのか、咄嗟に分からなかったらしい。呑気な声を上げ、

それからようやくジタバタもがき始める。

「ふにゃああつ!! ご、ご主人様あつ!!」

「つたく、だから油断するなど言ったのに……」

竜也は溜息を吐きながら、美鈴を助けるために踏み出そうとした。しかし、彼が動くより早く、新たな影が戦いの場へ飛び込んでくる。

影の正体は一匹の狼であった。

柴犬よりも二回りは大きく、それでいてしなやかな身体つき。月の冴え冴えとした光を吸収したような白銀の毛並。

全てが美鈴の子猫姿と対照的に、野性味のある美しさを醸し出している。

狼は振れあう枝の中へ真つ直ぐ突っ込むと、鋭い牙で美鈴を縛める箇所を噛み切った。

「にゃあつ!!」

押さえるものがなくなり、少女の身体は地上数メートルの高さから落下する。それを狼は素早く背中受止め、枝をかいくぐりながら、猛スピードで脱出した。一瞬後には竜也の隣へ到着している。

「あ、ありがとね。白雪ちゃん」

地面に降りながら、礼を述べる美鈴。それに対し、白雪と呼ばれた狼が口を開いた。

「美鈴、しっかりしてよね。今のあるたの役目は竜也のガードっ。あんたが足を引つ張っ

てどうすんのよ」

突き放すように発せられたのは、まぎれもない少女の声だった。

言い終えた白雪は、軽やかに地を蹴り、宙返りする。と、銀色の肢体は美鈴と同じく、瞬きするほどの間だけ形を失い、すぐに人として再構築された。

こちらの姿は声のイメージ通り、きつい雰囲気的美少女だ。

髪は腰まで届くほどに長く、変身前の輝きをそのまま保っている。切れ長の瞳は、さながら日本刀のように鋭い。

美鈴と揃いの巫女衣装を纏う肢体は、全体的にスレンダーな印象であった。そして、頭からは狼の耳が、お尻からは狼の尻尾が生えている。

「ごめん……」

叱られた美鈴はシュンとうな垂れた。細長い尻尾も下へ垂れてしまう。その申し訳なきような姿を一瞥してから、白雪は竜也に視線を移した。

「竜也、もう結界は張り終えたわよ。これで外から戦いの様子を見られる心配はないから」

「手際がいいな」

竜也は口の端を上げる。だが、白雪はニコリともしなかった。

「……別に。あたしなら、いつもこれぐらいやれてるでしょ」

口調も愛想がないままだ。

「にやははあ……っ」

舌足らずな調子で得意げに笑った美鈴は、そのまま竜也達に近付いてきた。「な……何をっ……何する気なのおっ!? 駄目っ……止めっ……こらああつ……変なことしないでえええっ!」

狼少女には、美鈴の行動がよく見えていないらしい。確かめようにも、これ以上後ろを向けば、落下してしまう。逃げようともがいても、秘洞を抉られてしまう。結局、彼女は不安定な格好で、はしたなく悶えるしかないのだ。

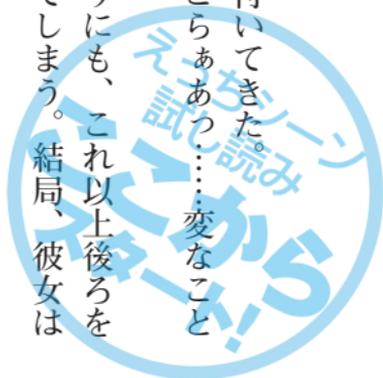
そして、ついに白雪の真後ろに美鈴が立った。湯をたつぷり含んだ彼女の尻尾は、標的である尻の谷間をツンツンと突き始める。こうなると竜也の位置からも正確な動きは見えない。彼女らの反応から、想像するしかなかった。

「にやはっ……美鈴、今日は白雪ちゃんより偉くなっちゃったみたいっ」

そう笑う美鈴の目には、単なる無邪気さだけでなく、あどけないが故の残酷さも見え隠れしている。彼女は捕まえたネズミを弄ぶ猫と同じで、感じながらも不安そうな白雪の姿が気に入ったらしい。

「美鈴ね……おマ○コに尻尾の毛がチクチク当たるのお……っ。ねえっ……白雪ちゃんも……お尻がくすぐりたいんでしょお?」

甘い声で囁きかけながら、猫少女はさらに半歩グツと踏み出す。刹那、白雪が派手に仰



け反った。

「あつ……やああああつ!! は、入ってくあああううううつ!!」

(おつ……始まった……かつ……!)

どうやら長い尻尾は一切の遠慮なしに、排泄のための小さなすぼまりを貫いたらしい。白雪の反応がそれを雄弁に物語っている。同時に、美鈴も声を淫猥に揺らしていた。

「ひやううんつ! これ……えつ……美鈴……もつ……尻尾おつ……気持ちいいつ!」

素股プレイでもするように、尻尾が割れ目やクリトリスを圧迫しているらしい。あるいは、白雪の括約筋で尻尾を絞られるのが良いのだろうか。ともあれ、彼女は切なげな声色を保ちながらも、どこか楽しみに宣言をした。

「あつ……じゃ……あつ……動くつ……ねええつ……!」

「い……やつ……待つ……うひああああつ!!」

白雪の哀願は途中でよがり声に変わってしまう。美鈴が男のするように、腰全体を前後に往復させたからだ。その勢いはかなりのもので、湯を吸って重くなった茶色の髪までが、ユサユサと不規則に躍っている。

(俺の方にも……当たってく……るう!)

竜也は思わず呻いた。勃起した男根さながらに硬くなった尻尾の切っ先は、腸内の薄い肉壁を続けざまにノックして、秘所に収まったペニスへも振動を送り込んでくる。

（なんのっ……!）

竜也は競うように力を強めた。下半身をますます弾ませるのはもちろん、両腕でも白雪の肢体を持ち上げ落とし、持ち上げ落とし、持ち上げ落とし。

律動の異常なまでの激しさは、そっくり男根にも跳ね返り、陰茎は落下速度そのままの勢いで、肉壁に扱かれた。さらに美少女二人の嬌声が、肉体的な快楽に負けないほど、竜也を酔いしれさせる。

「なっ……に、これええええええあつ！ うごつ……動くうううつ！ お腹の中つ……変な風につ……いいあああつ！ かき回してらううううつ!!」

「気持ちいいつ……気持ちいいよおおおつ！ 尻尾おおつ……おマ○コに食い込んじやうううう！ 白雪ちゃああんつ……ご主人様あああつ……動いてえええつ！ もつと動いてえええつ！」

竜也のペースアツプは、美鈴にも影響しているらしかった。

（そーいや、さつきイツたばかりだもんな……つ!）

淫らな悦びを完全に受け入れた少女は、今や身体中が敏感になっているのだろう。

「よしっ！ 美鈴も白雪も纏めて気持ちよくしてやるっ！」

ケダモノさながらに吠えた竜也は、屈伸するように足を曲げ伸ばしして、白雪を一層突き上げる。結果、竜也の下腹部は白雪の下腹部に、白雪の尻は美鈴の下腹部にぶつかり、

二つの結合部からは恥ずかしい蜜の音が止め処なく湧き起こった。

グチュグチュッ！ ジュブッ！ ジュポッジュボッズボポッ！

「うあああたるううううっ！ 奥がつ……あうやああはああっ！ 熱いいいいいいっ！」

「ひにやあああつ！ これっ、いいっ！ いいのおおおつ！ ご主人ひやまあああっ！」

竜也の思うままにより狂う白雪と美鈴。特に美鈴は、尻尾を使って自分と白雪の弱い場所をピンポイントで愛撫できるのだ。彼女が参加したために、白雪は絶頂に向けて、強引に押し上げられ始めていた。

「いっ……あああああつ！ 竜也あああつ！ イクッ……あたしいいいいっ！ こんないやらしい格好でっ……あああああつ！ イクッ……イッちやうううううううっ！」

先ほどまで常識に縛られていた狼少女は、二穴責めのあまりの衝撃に、恥じらうことさえ忘れてしまったらしい。聞かれてもいないのに、イク、イク、と口走り、自らの浅ましさを竜也にアピールしている。

さらに最初から自制心など持ち合わせていなかった猫耳少女は、眉をハの字に垂らし、口元を淫蕩な笑みの形に歪め、アブノーマルな行為に没頭しきっていた。

「白雪ちゃああんっ！ イこうっ……よおおおつ！ 美鈴もっ……イクっ、のおおおつ！ 尻尾でイッちやうのおおおつ！ だからあああつ……ふひやあああああおうっ！」

一際大きな声と同時に、猫尻尾が盛大に波打ったらしい。絶え間ない白雪の喘ぎが、一

れこそ身体中を、恥知らずにわななかせている。さらに涎まみれの口からは舌を覗かせ、シャープだった瞳からは随喜の涙をこぼし——壊れてしまったような至福のアクメ顔を、竜也にさらけ出していた。真後ろにいる美鈴へ背中を預けていなければ、そのまま後頭部から床へ落下していたに違いない。

秘所もきつく強張っていた。その収縮が、散々弄ばれたお返しのように、膣内深くへ潜り込んでいた男根を締め上げる。

「ううおおおおああああおおおっ！」

絶頂間近だった竜也が、今日一番の蠢動しゅんどうに耐えられるはずもなかった。ペニスの細胞一つ一つを硬直させるような感覚に脳天が灼かれ、次いで細胞の硬さを跡形もなく破裂させるような凄まじい解放感が、残り僅かだった理性を押し流す。

解放感。ペニスの根元へ溜まっていた子種にも、鉄砲水のような勢いを与えた。
ビュバツ！ ドクドクツ……ゴビュルルウウツ！

多量の白濁液は、尿道を擦り上げ、狭い鈴口をこじ開けて、二度三度と噴出した。そして、彼とほぼ同時に、美鈴も本日二度目のエクスタシーを迎える。

「にひゃあああああああああああきやあああああううううっ！」

彼女は立ったまま、伸びをするように背筋を反らして喉を震わせていた。その強張りが尻尾を妙な具合に捻らせたらしい。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>